昏い道連れ

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
昏い道連れ

【Ｎコード】
Ｎ４５５８Ｙ

【作者名】
洸海

【あらすじ】
妖退治を生業とする流れ者の雷火は、雨宿りに選んだ木陰で一人の少年と出会う。神官戦士になるために必要な「しるし」探しの途中だという彼と、ひとまず共に行くことにする雷火。だが少年の背後には、ひっそりとついて来る不吉な昏い影があった。◆和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ有。※残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付けるか付けまいか悩むレベルです。

一　雨宿り（1）（前書き）

上代と室町だか江戸だかをごっちゃにしたような、なんちゃってジャパニーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてご覧下さい。

一　雨宿り（1）

一

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからってのもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稲妻の光は、他のどんなものより格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞって穴蔵に頭をつっこんで震えている遥か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜ける。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もっとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかって、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりドザーッと来られた日には、まったく！

「くそったれ！」

文句のひとつも言いたくなるってもんだ。空きっ腹に雨がしみるぜ、ちくしょうめ。

右にも左にも、人家はまったく見当たらなかった。うち捨てられて荒れ放題の畑、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂った湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言ったのが正しければ、そろそろ豊平（とよひら）の村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖（あやかし）退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へった。

手の甲で何度も目を拭ったが、後から後から滝のように雨水がしたたり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か――あるいは

『何か』――がいるとは思わず、やれ助かったと木陰に駆け込んだだけだった。
「ああくそ、ひでえ目にあったぜ」
ぷう、と息をつくと、水しぶきが散った。いやもう、頭のてっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいいとこだ。どっからどこまでが自分の体で、着物で、草鞋（わらじ）なんだか、わかりゃしねえ。目ん玉まで流れちまってやしねえだろうな。
あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。
フッ、と後ろで何かが息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱっと振り返り、腰に差した刀を抜いた。
待ってましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だろうと、こいつの前には……
「って、なんだオイ」
構えた刃を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらした。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真っ黒の犬っころだったのだ。子犬と言うにはでかいが、まだ成犬（おとな）じゃない。クゥンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじっとこっちを見上げてやがる。
「びっくりさせんじゃねえよ、わんころが。腹がへってんのか？悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありゃ、自分で食ってるよ」
やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじっと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。
「だから、何も持ってねえっつってんだろ。シッシッ」
別に犬は嫌いじゃねえが、こうもまとわりつかれちゃ、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちょいと袂を引っ掻きやがった。
「ええい、食っちまうぞコラ！」
業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻ってこい」
子供の声が言うのが、同時だった。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなって声のした方を振り向いた。
木立の奥の暗がりに、ぼうっと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかった。白犬を連れた、白い着物の子供だ。見たところ十二歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？
黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそっちへ駆け戻って行った。小僧は黒犬の頭をちょっとなでてから、顔を上げてまっすぐに俺を見た。
「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構ってくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」
「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」
餓鬼から見りゃおっさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。見知らぬ餓鬼から小父（おじ）さんなんぞと呼ばれるほど、老けちゃいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。
「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳って分かんなくてさ。第一この天気でこの暗がりでその格好じゃ、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」
笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまった。確かに、薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立ってたんじゃ、人か化け物かも分からねえな。
「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束ってことは、神殿の小僧か」
俺が何げなく問うと、小僧はふっと表情を消した。どうやら身の上についちゃ、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作ったような明るい口調で答えた。
「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきゃいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそう、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄（クロガネ）、こっちの白いのは雪白（ユキシロ）。俺は真理（シンリ）だよ」
「ご大層な名前だな」
俺は呆れて二匹の犬を眺めた。わんころなんざ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがって、さすが神殿育ちはお犬様も違うってことかねぇ。小僧に至っては真理サマと来る。ぺっぺっ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙ってるわけにゃいかねえ。
「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」
「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかった」
けろりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、口が半分がひきつる。
「おい小僧、長生きしたきゃ、その呼び方はするんじゃねえ」
「どうして？　流れ者とか根無し草とか言うより、正しい呼び方だと思うけど」
きょとんとした小僧の面を張り飛ばさなかったのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかったからだ。
「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かっ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治をするのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」
「だって本当のことだよ」
「大人が話してる間は黙ってろ。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕っ節だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやってる、ってわけだ。飯の種をくれてやってんだ、ありがたく思え、ってな」
大体があの連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしやがる。月華みたいな刀は妖を斬って穢れが溜まるから、時々神殿へ持って行って清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。
「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そうな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまって、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

一　雨宿り（2）

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事さ」
　ため息をつくと、腹の中に残っていた最後の空気までなくなったような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持ってねえか」と投げやりに訊いた。
「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」
　がっくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとんと腰を下ろす。ちぇっ、本当にこの二匹の犬を食ってやれたらいいんだがなぁ。
　と、小僧は何やらごそごそやって、胴乱（どうらん）から小さな物を取り出した。
「これぐらいならあるけど」
　この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱっと小僧の手に飛びついた。そしてふたたびがっくりする。木の皮じゃねえか。
「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」
　ほら、と小僧が言うので、何もないよりはマシかとその木っ端を受け取ってくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙な味が染み出てくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく飢えがおさまったような気がした。不思議なもんだ。
　俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじっていると、横で小僧が勝手にしゃべりだした。
「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ者には感謝しろって教えられたんだ」
「へーぇ、そりゃまた奇特なこった」
「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ないんだって。一匹二匹の小さな妖が悪さをしたからって、ちょっと行

って退治する、ってことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だってわけ」
　小僧はそこまで言って、俺が聞いてるかどうか確かめるように、こっちの顔を覗き込んだ。ちぇっ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢ってのはこういうのを言うのかね。
「知ってる？　賞金稼ぎの中には、元神官戦士って人も結構いるんだよ」
「そいつぁ初耳だな」
　俺は思わず本気で驚いてしまった。小僧は得たりとばかり、にっこりする。
「きっとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」
　厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃねえよ、ちくしょう。俺は苦い顔で睨んでやったが、薄暗がりだから見えなかったらしい。小僧は気にせず話を続けた。
「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になったのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行っちゃうんだってさ」
「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんざ、どいつもこいつもくそったれだ」
　俺は言い捨てて、雨足の弱まってきた空を見上げた。さっきより明るくなってきたようだ。これなら、もうじき出発できるだろう。今日中には豊平に着きたいからな。
　小僧は、俺があんまり感動しなかったせいか、ちょいとがっかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？　俺は弱い者いじめした悪党か？　本当のことを言っただけだってのに！　ああもう。
　しょうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやった。
「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖ばっかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどかーんとでかくて立派だから、神官の連中もお高くとまってやがるんだ」
「そうかもね」
小僧は言って、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。
「おっ……雨がやんだみたいだな。んじゃな」
俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちょいとつまんで、
「これ、ありがとよ」
礼を言ってからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、小僧が慌てて立ち上がり、二匹の犬とそろって俺を見上げた。おい、まさか。
「もう行くの？」
……待て。ちょっと待て、待てったら！　そんな目で俺を見るな！　しかも三人がかりとは卑怯だぞ！
「勘弁してくれ」
俺はうめいて顔を覆った。冗談じゃねえ、てめえの飯もままならねえってのに、いきなり一人と二匹の食いぶちまで面倒見られるかってんだ。
苦悩する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。
「待ってよ、俺まだ何も言ってないよ」
「言ったも同然だろうが、くそ、わんころまで一緒になって見つめやがって！」
「あはは、おじさん、犬好きなんだ」
「おじさんじゃねえっつってんだろ！」
凄んで見せたが、効果はなかった。ごめんごめん、なんて言いながら、小僧はけたけた笑ってやがる。
「はぁ……まったく。あのな、俺はこれから豊平に行って、周旋屋で仕事もらって、それを片付けなきゃ飯一杯にもありつけねえんだぞ。ついて来たって、いい事なんざなんっにもねえんだぞ」
「心配しなくても、俺だって妖退治に手を貸せるよ。こう見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持ってる。雪白と黒鉄も戦えるよ」
「どうだかな」
俺は胡散臭い気分で二匹の犬を見やった。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を値踏みするような目付きをしやがった。何様のつもりだ、このわんころが。
「どっちにしろおまえらの行き先も豊平だってんなら、しょうがねえ、ご一緒するさ。けど、いいのか？　何か探し物をしてるんだろ」
念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になってうなずいた。
「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かってるわけじゃないから」
「……へえ？」
いったい何を探してるってんだ？　ちょいと気にはなるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろうし、俺の知ったこっちゃねえな。
「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」
景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きだす。
少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらっと後ろを振り返った。小僧とわんころはしっかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなってくれねえらしい。
（しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ）
俺は何も見なかったふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がりが、うっそりと佇んでいた。
振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙って見送り……それからゆっくり、後を追って動き出すのだ。

妖とは少し気配が違う。今のところ悪さをする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放っておきゃ自然に離れてくれるだろう。たぶん。

（でなけりゃ、こいつの出番ってだけだ）

俺は左手で月華の鞘を握り、そうならないことを祈った。この刀であいつが斬れるかどうか、ちょいと自信がなかったからだ。

二　豊平村

二

豊平村はその名の通り、豊かな平地だ。田圃には稲が青々と茂り、構えのでかい家が続いている。村の中心部に近づくにつれて、街道沿いにちまちました家が増えてきた。里の者や旅人を相手にした、色々な店の並びだ。

俺の後ろを歩きながら、小僧は物珍しげに、やたらきょろきょろしている。まぁ、あちこちに走ってったり店先で騒いだりしねえだけ良しとするか……。里に入る前にあの影も薄くなって消えちまったようだし、贅沢言ってちゃきりがねえ。

道に面した店はどれも、構えはそれなりだが、商いは田舎の里らしく地味なもんばかりだ。鋳掛屋だの荒物屋だの、茶店だの。もちろん旅籠もあるが、今の俺たちゃ文無しだ。ちぇっ、早いとこ周旋屋を見付けねえとな。

「にぎやかな町だね」

ふいに小僧が言った。俺は振り返り、呆れ顔をする。

「深谷ってのはどんなド田舎だ？　確かにここはそれなりの村じゃあるが、町なんて言えるもんじゃねえぞ。町ってのはな、もっと色んな店がうわーっと並んでて、人通りもこんなもんじゃねえ。飯屋に煮売屋、小間物屋。職人だって建具師に大工に庭師に細工師とわんさか住んでるもんだ」

「ふうん。想像つかないや。深谷はね、百姓と炭焼きと猟師ぐらいしかいなくて、神殿にも明師様と書士さんがいるだけだったんだ」

「ミョウシ？　ああ、祭礼を司る神官だな。それと記録係のオマケつきか」

神殿てのは、神様を祀ってるだけじゃなく、里の住民の記録をつけてもいる。生まれた、死んだ、結婚した。そのいちいちに神殿が

絡むんだから、当然だって言やぁ当然だ。で、もちろんそういう事がある度に金がかかる。神官サマが帳簿までつけてたんじゃ、肝心の祭礼がおろそかになるってんで、その仕事専門の下っ端がいるわけで。

「そんなド田舎じゃ、神官一人でも事足りるだろうに。金が余ってるんなら、俺によこせってんだ」

けっ、と俺が毒づくと、小僧はこっちを見上げて、大人じみた苦笑を浮かべややがった。

「明師様はもうだいぶ、お年だったからね。書き物をするには目が不自由だったんだよ」

「おまえにやらせりゃ手習いにもなって、一石二鳥じゃねえか。おっ、周旋屋の看板だ。やっと見付けたぞ。ちょっとでも前払いしてくれりゃいいんだがな」

ごめんよ、と声をかけながら暖簾をくぐる。中には人っ子一人いなかった。ここが平和な里だって証拠だな。こりゃ、仕事があるかどうか怪しいぞ。

「誰かいねえのかい」

声を張り上げると、奥から「はいはい、ただ今」と男が一人、慌ててやって来た。血色のいいぽっちゃりした丸顔の中年だ。何がなし気に食わねえが、周旋屋の親父がどうでも仕事は仕事、銭は銭。

「よう。どうやらここは平和な里らしいが、流れ者もおこぼれにあずからせちゃくれねえか。できれば手っ取り早く済ませられるのがいいんだがね」

「それでしたら……」

親父は言いかけ、ぎょっと目を剥いた。なんなんだ？

俺は背後を振り返って、ああ、と納得した。餓鬼に犬ころまで連れた賞金稼ぎなんざ、そうそうお目にかかるもんじゃねえよな。

「後ろの奴らは気にすんなよ。そこらで行き会ってたまたま一緒になっただけだ」

「はぁ……でも、神官様で？」

「まさか。こいつは白装束を着ちゃいるが、まだ神官じゃねえ。一人前になるために修行してるところなんだとよ」
「それはまた、こんなに幼いのに感心なことで」
親父は愛想笑いを浮かべ、揉み手でもしそうな様子で小僧の顔色をうかがう。やっぱり気に食わねえ。
「そいつのこたぁどうでもいい。こちとら空きっ腹抱えて待ってんだよ、さっさと仕事をよこしやがれ」
苛々して物言いが剣呑になる。くそ、腹が減りすぎて親父の機嫌を取る余裕もありゃしねえ。もちもちしたその頬っぺた、むしりとって食ってやろうか。
俺の心中が分かったのか、親父は慌ててこちらに向き直ると、いそいそと帳面をめくりだした。
「はいはい、失礼致しました。何分この豊平は御霊も妖もとんと出ない所ですからね、神殿の方にもここ数年はまったくお願いすることもないほどでして……でもまぁ、お困りのようだから、これなんていかがです」
親父は帳面を広げ、俺の方に向けて差し出した。俺はざっと目を通し、妙な顔になる。
「ふーん？　要するに、この巫師（ふし）を追い出してくれってことかい」
「ええ、そうです。村外れに住み着いておりましてね、何やら怪しい影やら奇妙な生き物が、その家の近くをうろついているのが薄気味悪くて。とは言っても今のところは格別悪さをするでもないんで、神殿にお願いするほどのことでもありませんし。第一、神官様にお出で頂くとなったら、謝礼もかなりのものですから、とてもとても」
「なんで自分たちで追い出さねえんだい。里の衆が皆して鍬持って脅しをかけりゃ、一発で出て行きそうな気がするがね」
「無茶おっしゃらんで下さいよ。あたしらは妖のことも御霊（みたま）のことも、何も知らんのですよ。下手をして怒らせたらどうなるか！　だから皆で金を出し合って、賞金稼ぎに頼むことにしたんですよ」
親父は大袈裟なほどおびえた顔をして、身震いした。やれやれ、

白けちまう。
「まぁな、流れ者だったら祟られようが呪い殺されようが、あんたらは痛くも痒くもねえからな」
「何をおっしゃいますか、そちらさんは妖退治の玄人でしょう？　年寄りの巫師ひとりぐらい、簡単なものでしょうに。ああそうだ、引き受けて頂けるのなら、いくらか前払いしますよ。腹が減っては戦は出来ぬ。そうでしょう？」
痛いところを突いてきやがる。俺は苦笑いするしかなかった。村外れにおとなしく住まってる年寄りを追い出すなんざ、あんまり気持ちのいい仕事じゃねえが、仕方ねえ。こちとら腹と背中がくっつきそうなんだ。
「ああ、確かにな。ほかには何もねえんだろ？　引き受けるさ」

てなわけで、俺と小僧は無事、かなり遅い昼飯にありついた。
一膳飯屋はもう店仕舞いをしかけていたが、こういう時は子供と犬ころって取り合わせは激烈によく効く。給仕の女が、俺のことを人買いでも見るように睨みやがったのは、ちと引っ掛かるが、ともかくまぁ飯が食えりゃ何だっていいさ。
「お、来た来た。二日ぶりのまともな飯だ、ありがてえ」
湯気を立てている飯に両手を合わせてから、まずは一口。
「……？」
おかしいな、こんだけ腹が減ってりゃ大概のもんは美味いはずなんだが。まずくはねえんだが、何かこう、足りねえって言うか、妙な味だな。茄子の煮物の方は……うん、美味い。はて、どういうこった？
複雑な顔でもぐもぐ口を動かしつつ、思わずちらっと店の奥を見る。たまたま目が合った給仕の女が、俺の顔を見て眉を逆立てやがった。うへえ、くわばらくわばら。
慌てて飯に向き直って一心に食い、あらかた片付いた頃になって小僧が口をきいた。

「雷火さん」
名前で呼びかけられ、およ、と俺は目をしばたたいた。何度もおじさんと言ってはお兄さんと言い直すのが、いよいよ面倒になったってわけか。
「なんだ？」
「俺たちが追い出すっていう、フシって……何？」
おずおずと訊かれ、俺は目を丸くした。
「知らねえのか？　おいおい、冗談だろ。深谷ってのがいかにド田舎でも、一人ぐらいいなかったのか？」
「いなかったよ。神殿でも教わらなかったし」
「はぁ……こりゃたまげた。まぁ、そんな所じゃ巫師がどうのと教えてもしょうがねえよな。そうだな、どう言やぁいいか……」
俺は、足元で残り物をがっついている二匹の犬にちょっと目をやってから、もったいぶって説明してやった。
「巫師ってのはな、神官とは違うやり方で、妖や御霊を呼び寄せたり操ったりする連中さ。それで人に呪いをかけたり、人の秘密を暴いたり、縁結びや縁切りをしたりするんだ」
「悪い人たちなんだね？」
小僧が眉をひそめたので、俺はますます先輩面をしてそっくり返った。
「まぁ大半はそうだな。話の通じねえ恐ろしいジジババばっかりだ。だが、皆が皆そうってわけじゃねえ。病や怪我や災難をふっかけることも出来るが、逆のこと、つまり治す方も出来るんだ。ただ神官と違って連中は自分勝手にやってるから、そこんとこが厄介なのさ。病を治して貰いに行ったのに、怒らせたら逆にもっと悪くされるかも知れねえ。道ですれ違ったのに挨拶しなかったら、次の朝には大事な牛が死んでるかも知れねえ」
そこまで言って、茶をすする。小僧は難しそうな顔で考え込んでいた。
「やっぱり悪い人みたいに聞こえるけど」

「悪いこともするが、貧乏人にとっちゃ重宝でもあるのさ。さっきの親父も言ってたろ、神官は金がかかる、って。巫師の方がたいていは安上がりなんだ。それに、隣のいけすかねえじじいをぎっくり腰にしてくれとか、村一番の別嬪さんを嫁にしたいとか、そういう頼み事は神官には出来ねえしな」

俺はちょっと意地の悪い気分になって、にやにやしながら言った。はてさて、神殿育ちの純真な小僧がどんな反応をするものやら。

ところが小僧が言ったこととときたら、俺の予想とはてんで違っていた。

「でもこの村では、気味が悪いから追い出そうって言うんだね。しかも自分たちでするんじゃなしに、よそ者にやらせようとしてる。なんだか嫌な感じだなぁ」

およよ。こりゃ驚いたね。俺はとっさに何と言ったら良いものか分からず、馬鹿みたいにぽかんと口を開けて絶句した。真理の名前は伊達じゃねえってことらしい。

俺がまじまじと見ているのに気付き、小僧は顔を上げて「なに」と不審げに眉を寄せた。ちょいとばかし照れもまじっていたかも知れない。

「いやぁ、おまえさん、世間知らずかと思いきや、なかなか言うじゃねえか」

「えっ……俺、何か変なこと言った？」

途端に小僧は赤くなる。俺はにやっとして身を屈め、小僧に耳打ちした。

「いや、この仕事が気に食わねえのは俺も同じさ。でもそれは、村ン中じゃ黙ってな」

それから俺はまた体を起こし、やれやれとこれ見よがしに伸びをしてから、楊枝で歯をせせった。小僧は複雑な顔で俺を眺めていたが、やがてその目を楊枝入れに移し、おもむろに一本抜いて俺の真似を始めやがった。

「おいおい、やめとけよ。神官になろうってぇ奴が下衆な癖をつけ

ちゃ困るぜ」
「そうなの？」
　きょとんとして問い返し、小僧は楊枝を前歯で挟んでぶらぶらさせる。何やってんだ、こいつは。俺は苦笑してその楊枝を取り上げ、空になった茶碗に放りこんだ。
「それより、おまえのことを聞かせろよ。何か探してるってったよな。何なんだ？」
　俺の質問に、すぐには返事がなかった。小僧は目を伏せて、未練がましく楊枝を見ているふりをしたが、しばらくしてようやくぽつりと答えた。
「しるし」
「あ？」
「しるしを探してるんだ。一人前になる前に、誰もが自分だけの『しるし』を見付けなきゃいけないんだって。それが何なのかは人によって様々だけど、見れば必ず、それが自分の『しるし』だと分かる。だから、どこにあるどんな物かは、誰にも教えることは出来ないんだってさ」
「……何だそりゃ。んじゃ何か、『これだ！』って閃くまで、いつまでもどこまでも探し続けなきゃならねえってことか？　だったらそこらで適当なもの見繕って帰ったって、バレねえんじゃねえのかい」
　神官のやることたぁよく分からん。呆れた俺に、小僧は真剣な顔で首を振った。
「そういう問題じゃないんだ。法術や剣術を修めても、『しるし』を見付けなきゃ、自分を守ってくれる一番大事な力が得られないんだって」
「へーぇ。普通はどういうものなんだ？」
「よく知らないんだ。深谷には戦士がいなかったから」
「明師さんは、妖退治はしねえのか」
「儀式で祓えるものなら退治するよ。でも武器や法術で戦うのは、

法部の人。法師とか戦士とかね。俺はまだ侍士(じし)だけど。『しるし』はね、時々来て下さってた羽山の法師様の話だと、鴉や犬みたいな動物だったり、草木や川だったりするんだって。太陽や月をしるしに持つ人は、ものすごく強いらしいよ」

話が戦士のことになった途端、嬉しそうによくまぁしゃべること。それだけ憧れてるってことなんだろうなぁ。その笑顔があんまり無邪気なもんで、俺は、胸に浮かんだ疑問はどこぞへ蹴っ飛ばして、別の事を口にした。

「おまえのも、何か格好いい『しるし』だといいな。何たって名前が真理なんだ、それに見合うのでなきゃな」

「俺は別に、蟻とか石でもいいんだけどね」

照れたように言いながらも、真理は期待に目を輝かせている。だから俺は言い出せなかった。

おまえみたいな小せえ子供が、もう一人前になるための『しるし』探しに出されるもんなのか、とか。

誰も深谷の名前を聞いたことがねえような遠い土地まで来なきゃ、『しるし』ってのは見付からねえもんなのか、とか。

――そういうことは、訊いちゃいけねえ気がした。

三　初仕事（1）

三

腹ごしらえを済ませて一休みした後、俺と小僧は連れ立って村外れへ向かった。もちろん、白黒のわんころどもも一緒だ。

巫師の住み着いたあばら家ってのは、田圃の間を走る小川に沿って、ずっと川上へ行ったところにあるって話だったが、途中やたらと二匹の犬があちこち嗅ぎ回るんで、はかどらねえったらありゃしねえ。日が暮れる前にやっつけちまいてえのに、人間様の都合なんざお構いなしだ。

田圃にはちょうど水が張ってある時期で、稲の青々とした葉が風にそよいでいる。世話が行き届いていると見えて、何だか偽物臭ぇぐらいにきれいだ。川っぺりにはぽつぽつと若木が植えられていたりして、趣もある。しかし、あいにくこちとら風流とは縁遠い流れ者だ。わんころに付き合って、田圃を見ながら歌を詠むってわけにもいかねえ。

「おい真理、この白黒兄弟、もちっときちんとしつけとけよ。道草ばっか食いやがって」

「何かが気になるんだよ」

答えた小僧も落ち着かない様子で、辺りを窺っている。

「何かって、何が」

「分からない。でも、この村は変だって気がする」

「おまえ、ほかの村を見たことあるのか？」

思わずそう言った俺に、小僧はいっちょまえにムッとした顔を向けた。

「そういう意味じゃなくて」

「ああ、分かった、分かってる。悪かった」

俺は慌てて手を挙げ、小僧を遮った。やれやれ、冗談が通じねえ

なぁ。俺は足を止めてため息をつき、草むらでふんふんやってるわんころどもを見やった。
「確かにな、この村はどことなく妙な空気が流れてる。それは俺も同感だよ。このぐらいの村になりゃ、人里に群がる小物の妖がちらほらしてるもんだ。神殿がすぐ近くにある場合は別だが、ここの神殿はどうやらちょいと遠いようだし、そこらに何か飛んでたっておかしかねえ。だがさっぱり見当たらねえとなると、村全体によっぽど強力なまじないでもかけてあるのか、その村外れの巫師がこの辺の妖を一匹残らず呼び集めてるのか……」
曖昧に言葉を濁した俺に代わって、小僧が偉そうに締めくくった。
「何にしろ油断は禁物、だね」
生意気な。そりゃ俺の台詞だっつの。とは思えど、それを口に出しちゃ大人気ねえ。
「そーゆーこった」
それだけ言って、ぺしんと軽く小僧の頭をはたいてやった。
「おら行くぞわんころども。さっさと片付けて財布にも餌をやらねえと、また野宿になっちまうぞ。おまえらは地べたで良くてもな、人間様はたまにゃ布団で寝たいんだ」
白黒二匹を急き立てながら、さらに小川沿いの道を進む。田圃が途切れて人影もなくなった辺りで、ようやく目指す小屋が見付かった。どうやら水車小屋だったらしいが、ぶっ壊れちまってるのは遠目にも分かった。茅葺き屋根にペンペン草が生えてらぁ。
「ふーむ……見たとこ、特に変なもんはいねえな」
ちょいと手前で立ち止まり、とっくり小屋を眺めてみる。妖の姿はちらとも見えねえし、御霊の影もねえ。周旋屋の親父が言ってた様子とは、ちと違うんじゃないか？
「しかし何だね、嫌な感じがしやがるよ」
無意識に手がうなじをさすっていた。妖にしろ御霊にしろ、性質の悪いのがいやがる時は、ここら辺がムズムズする。今もそうだ。
横を見ると、小僧は打って変わって真剣な顔つきになっていた。

二匹の犬はそれぞれ小屋を睨み、喉の奥で小さく唸っている。どうやら、こいつらにも分かるらしい。
「とりあえず、俺が様子を見るからな。おまえらは下がってろよ」
餓鬼とわんころに先陣を切らせるわけにゃいかねえ。俺は用心しいしい小屋に近付き、まだ明るいのにきっちり閉ざされた戸を叩いた。
「おい、誰かいるか」
バンバン。てのひらで二回。返事はない。
「いるんだろ。巫師のじいさんよ」
ドンドンドン。拳で三回、叩き終えるや否や、ゴトリと戸が開いた。隙間から覗いたご面相に、俺はぎょっとなって後ずさる。シミと皺だらけの、病葉（わくらば）みてえな皮が骸骨にへばりついた、なんとも化け物じみた顔だ。目ん玉は白く濁っていたが、それでも俺が見えるのか、ぎょろりとこっちを睨んでやがる。戸を開けた手はまるっきり枯れ枝みてえだ。
「よう。村の周旋屋でちょいと頼まれてな」
なんとか俺がそう言った途端、犬どもがワンワン吠えだした。くそ、うるせえぞ！　気が散るじゃねえか。
じじいは瞬きもせずに俺を見つめたまま、ゆっくり首を傾げた。そのままぽろっと首がもげちまいそうだ。うへえ。俺はゆがめた顔をごまかそうと咳払いして、言っても無駄だと予感しながら言葉を続けた。
「あんたが何をしたか知らねえが、村の連中はあんたがいるだけで不気味なんだとよ。ここからあんたを追い出してくれって頼まれたんだ」
「わしゃぁ……出て、行かん……ぞぉ」
嗄れた声が、じじいの喉から隙間風よろしく漏れてくる。今にも死にそうな声のくせに、目だけはぎらぎらして、おっかねえったらないぜ。
「そうは言ってもな、こんなとこに住んでたって、あんた何にもい

い事はねえだろう。村人に嫌われてるんじゃ、客も来ねえんだし……って、ああもう、ワンワンうるせえな！」
俺が後ろをちらっと見て舌打ちしたと同時に、じじいがにたあっと笑った。
「村の衆はぁ、親切じゃで、な」
「何？　まさか」
やべえ！　背筋に冷たいものが走り、俺は反射的に大きく飛びすさった。
入れ替わりに白と黒の影がさっと前へ飛び出し、じじいに躍りかかる。その瞬間、じじいの体が音を立てて破裂した。
「うわッ！」
固いものに突き飛ばされ、俺はぶざまにひっくり返った。ギャンッ、とわんころの悲鳴が聞こえる。ちくしょう、何がどうなってんだ！？
頭を振って起き上がろうとしたが、俺の体はでけえ木の根っこにがっちり押さえ込まれていた。なんなんだ、くそ！　月華を抜こうにも手が動かせねえ。じたばたしていると、根っこに見えたものが、ナメクジみたいにぐにゃりと動いた。
「いってぇ！　くそぉッ、離しやがれ化け物め、この……うげ！」
暴れると、根っこもどきがますます強く締め付けてきやがった。無数の細い管が伸びて俺の体にはりつき、次々にブスリと突き刺さる。俺を針山にする気かよ！
その瞬間、俺の目の前にぬっと何かが現れた。
と思ったら黒鉄だ。化け物の根っこに食らいつき、牙を突き立てる。途端に化け物は、釣り上げられた魚よろしくビチビチ跳ねて、俺を離した。しめた！
隙を逃さず素早く立ち上がり、月華を抜く。巨大な根っこは犬を振り落とそうと暴れまくっていたが、黒鉄の奴はがっちり食らいついたままだ。いいぞ、やるじゃねえか。
「今度はこっちの番だ、よくもやりゃあがったな！」

俺は月華を振りかぶり、のたうつ木の根に斬りつけた。感触は確かに生木だったが、傷口からは赤黒い血が噴き出し、根っこは大慌てでズルズル下がって行く。黒鉄がようやく奴を離し、俺のところに駆けてきた。

「助かったぜ、ありがとよ」

まずはわんころに礼を言ってから、俺はようやく何がどうなっているのかを見た。

三　初仕事（2）

じじいがいた場所には……わけわかんねえ化け物がいやがった。根っこだけの木、とでも言えばいいのか？　普通なら幹になってるはずのところには、じじいの頭がくっついていた。しかも馬鹿でけえ。目ん玉ひとつで牛の頭ぐらいあるだろう。そのまわりから、大人が二人がかりでも抱えられそうにない太い根が十本ばかり張り出して、のたりのたり気味の悪い動きをしてやがる。びっしり生えたヒゲ根がザワザワうごめくさまときたら、まるでムカデの足みてえだ。その、数百本はありそうな根の間から、時々ちらっと嫌なもんが顔を出す。しなびた鳥の死骸だとか、しゃれこうべだとか。

てことは何か、つまり俺は奴の肥やしにされかかったってわけか？　うえっ。

俺が愕然と立ち尽くしていると、小僧と雪白が駆けつけてきた。

「おう、無事だったか」

俺が言うと、小僧はうなずいて、嫌そうな顔でじじいの成れの果てと向き合った。

「古い木の妖だね」

「ああ、そろそろタコに化けて海に行きたいらしいぜ」

ようやく奴の見た目が何に似ているか気付き、俺はそんな冗談を飛ばした。が、山奥育ちの小僧には通じなかった。

「タコって？」

「……ああいう、ぐねぐねうにうにした生き物だと思っとけ。それより、どうやって始末する？　俺一人じゃ、あの『足』全部はさばききれねえぞ。元が木だから、放っといて逃げちまえば、そう遠くまで追っかけては来ねえだろうがなぁ」

「そういうわけにはいかないよ」

即座に小僧が言い返す。まあな、と俺もうなずいた。そして二人同時に口を開く。

「金が入らねえからな」
「人を襲う妖なんだから」
見事に全然違うことを言っちまって、俺と小僧はしらけた顔になった。そんなこったろうとは思ったがね。やれやれ。俺はちょっと肩を竦めてから、気を取り直して続けた。
「ま、何にしろ始末はつけねえとな。俺もやられっ放しは癪だ。さてどうするかね」
「木だから火には弱いと思うんだけど、半端な炎じゃ効きそうにないしなぁ。おじさん、真名（まな）の法術は使えない？」
「あ？　俺は神官じゃねえぞ。法術なんざ使えるかよ」
「そうじゃなくて……いいや、説明は後で。雪白、黒鉄！」
小僧が呼ぶと、二匹の犬はさっと小僧の前に座った。小僧が左右の手をそれぞれの頭に置き、何やらぶつぶつ唱える。諸々の神たち聞し召したまえ、とかなんとか言ってるようだが、そんな小声で神様に聞こえるもんかねぇ。
俺はなんとなく胡散臭い気分で見ていたが、その目の前で、二匹の犬がぼんやり輝きだしたもんで、さすがにあんぐり口を開けちまった。しかもそれだけじゃねえ、わんころどもの姿がこう、伸びたり膨れたりしたように見えたと思ったら！
聞いて驚け、瞬きひとつの間に、そこには白と黒の戦装束に身を包んだ若武者ふたりが立っていたのだ。いやまったく、顎が外れるかと思ったね。ぽかんとしている俺に向かって、白い方は犬の時と同じく冷たい目をくれ、黒い方はにっこり笑いかけやがった。俺は何度も瞬きして目をこすったが、どうやらまぼろしじゃぁないらしい。
「この世は一体どうしちまったんだ？　じじいは弾けるわ、犬は化けるわ。俺は夢でも見てるのか」
「これは仮の姿だよ。おじさん、準備はいいかい？　できるだけ中心に近付いてから、本体に手のひらをしっかりと押し付けて。それから、俺の言うことを繰り返すんだ」

てきぱきと小僧が指図する。こんな餓鬼に命令されるのは嬉しかねえが、化け犬の飼い主じゃ逆らえねえよなぁ。どっちにしろ俺はこんな大物相手に戦ったことはねえ。こいつの言う通りにするしかなさそうだ。ちぇっ。

あれこれ考えて俺がむっつり黙っていると、雪白の方がじろりと睨んできやがった。ああ可愛くねえ！

「分かったよ」渋々答えて、俺は月華を構えた。「さっさとやっちまおう。俺の血がすっかり流れ出ちまわねえうちにな」

そう、さっきやられた、細い針で突かれたような傷から、いつまでもしつこくじわじわと血がにじみ出てやがるのだ。このままじゃあ目が回っちまう。小僧もやっとそれに気が付いたらしく、さっと青ざめた。

「おいおい、そんな悲惨な顔するな。まだ倒れやしねえよ。んじゃ、行くか」

にやっとして見せた俺に、小僧は黙ってうなずく。その目が前を向き、妖を見据えた。

枯れ木じじいの方も、俺たちがまた近付くつもりだと察したらしい。根っこが激しく動きだし、俺たちの方へ伸びてきた。その細い先端が足に届きかけた寸前、

「行くよ！」

小僧が地を蹴った。即座に白と黒の影が従う。俺も並んで走りだしていた。

二人の若武者が太刀をふるい、襲いかかる木の根をなぎ払う。もちろん俺の月華も負けちゃいねえ。しかし太い根はちょっとやそっとじゃ切れねえし、細い根はいくら払っても次々新しいのが生えてくる。

妖の血が辺り一面に飛び散って、何とも言えない臭気を放ちだした。その中を、俺と小僧は肩を並べてとにかく突き進む。

じじいの吐き出すかび臭い息が、まともに顔に吹き付けた。うえっぷ！　それを避けて横に回ると、小僧がいきなり俺の左手をつか

み、化け物に押し付けた。樹皮を張った生肉のような感触に、俺としたことが思わず怯みそうになる。
「おい！　くそ、無茶すんじゃねえ！」
慌てて俺は右手を振り上げ、危ういところで数本の根をなぎ払ったが、小僧は見ちゃいなかった。
「背中は二人に任せて、復唱して。いい？」
ああ、そういやそうだった。視界の端でじじいの目玉がぎょろりと動くのが気になったが、すぐに黒鉄が俺の背を守って立ち、ついでにその鬱陶しい光景も隠してくれた。
「我が名は雷火」
小僧が唱える言葉をそのまま繰り返す。
「火は赤きほむらなり」
気のせいか、てのひらが熱くなってきたような……
「この名において命ずる」
手だけじゃねえ、胸の奥、肺腑の中に火がついたような、
「火炎招来！」
――刹那、それが爆発した。
いや、俺の中の火だけじゃねえ。現実に、目の前が真っ赤に燃え上がったのだ。
耳をつんざく悲鳴と熱風にふっ飛ばされ、俺は後ろへごろごろ転がっていった。あち、あちち、あちちち！
地面に転がったままじたばたしていると、小僧が駆けつけて、俺の体に手をかざし、何かを払いのけるような仕草をした。途端にすうっと熱が引いていき、俺はほーっと大きな息をつく。ああくそ、死ぬかと思ったぜ……。
大の字になって伸びちまった俺の上から、小僧がひょっこり顔をのぞかせやがった。
「大丈夫？」
「んなわけねえだろ！　馬鹿野郎、俺を焼き殺す気か！？」
俺は跳び起きて、噛みつくように怒鳴った。が、わめいた口を閉

じるか閉じないか、犬に戻った黒鉄の奴が飛んできて、べろべろ顔を舐めまくるもんだからたまらねえ。ああもう、格好悪くて怒るに怒れねえだろが、ちくしょうめ。

「舐めるな！　分かった、分かったよ、大丈夫だからやめろって！」

やっとのことで黒鉄をひっぺがすと、俺は袖で顔を拭った。やれやれまったく……。

小僧がにやにやしてやがるのを睨みつけてから、俺は自分の表情をごまかそうとして、盛大な火柱を仰ぎ見た。生木だってのによくまあ燃えるこった。じじいはもはや悲鳴も上げず、根っこの端まですっかり炎に包まれている。水車小屋がべしゃんと音を立てて、炎の海に沈んだ。

思わずじっと自分の手を見つめていると、横から小僧が言った。いや、小僧ってのはやめたがいいな。化け犬の飼い主で、しかもこんな派手な火柱を立てちまう餓鬼だ。おっかねえ真理様のご高説拝聴、と言わなきゃならんか。

「ものの名前には力があるんだ。もちろん、人の名前もね。だからやり方さえ知っていれば、自分の名前からその力を引き出すことができるんだ。神官でなくてもいいんだよ」

「はー、なるほどねえ……まぁしかし、てめえがこんがり焼けちまうんじゃ、使いてえとは思わねえな」

「練習すれば、もっとうまく使いこなせるようになるよ」

「まあ、気が向いたらな」

それだけ言うと、俺は考えるのも疲れて、またひっくり返ってしまった。今日は働き過ぎだ。慣れねえことするもんじゃねえや……。

四　村人と影（1）

四

火がおさまると、俺は川の上流で体を洗って、真理の持っていた血止め薬を塗ってもらった。妖はすっかり消し炭になっちまって、もうすっかりただの古い木にしか見えねえ。

最前まで燃えていた炎がちぎれて飛んでったみたいに、空はまぶしい茜色に輝いている。明日はいい天気になりそうだなぁ。もっとも、俺たちが無事に明日を迎えられなきゃ、天気がどうでも関係なくなっちまうがね。

「さーて、と。ここからが面倒だぞ」

道端に座り込んだまま、俺は天を仰いだ。真理がきょとんとしてこっちを見る。お気楽な奴だぜ。

「いいか、あのじじいは何て言ってた？　村の衆は親切だ、ってな。ひとつ所からたいして動き回れねえ妖があそこまででかくなったってことは、誰かが餌の世話をしてやってたって事だ。だが村人を食ってたんなら、俺たちが出向くまでもなく、とっくに焼き打ちされてらぁな」

「ちょっと待ってよ、それじゃまさか、村の人たちが俺たちを騙したって言うのかい？」

「ほかにどう説明がつく？　流れ者なら、いなくなっても誰も気にしねえだろ」

「でも、妖が負けたらどうなるのさ？　今まで誰も倒せなかったみたいだけど、それにしたって、逃げた人もいるはずだよ。そしたら、神殿に知らせが行くはずで」

「そいつが神殿に行き着けたら、な」

俺は真理の反論を遮り、できるだけ淡々とした口調で言った。

「言いたかねえが、連中は獲物を選んでる。俺みたいにうだつの上

がらねえ流れ者は、せいぜい小物しか相手にした事がねえからな。まず確実に食われちまうだろうさ」
「でも運よく逃げられるかも……」
「そう、俺みたいにな。で、そういう流れ者が次にどうするか。俺たちゃ、この後どうする？　金が要るから仕事を請けた、そうだろ？」
そこまで言うと、やっと真理も察したようだった。愕然として口をぽかんと開け、絶句する。良い子にゃちと刺激が強すぎたかね……。俺は頭を掻いた。
「分かったか？　だから、ここからが厄介だって言ったのさ。依頼通り、怪しいじじいは追い出してやったんだ。金を貰わずに行く法はねえ。だが連中がおとなしく代金を払ってくれるかどうかが問題だな」
「神殿に知らせに行けば？」
「信じてくれるとは思えねえな。当の妖はこれこの通りだし、この村の連中は全員で口裏を合わせてるだろうよ。おまえが神殿の者だったらどっちを信じる？　胡散臭くて素性の知れねえ流れ者が、妖を退治してやったんだから金をよこせって言うのと、その流れ者に因縁つけられた上に水車小屋を焼かれたってえ可哀想な村人と」
「……」
さすがにもう、真理もそれ以上は言い返さなかった。俺たちは二人して、でっけえため息をついた。
「どうして村の人は、妖なんか養ってたんだろう」
「さあな。そんなこたぁどうでもいいさ。どんな理由があるにせよ、あの枯れ木じじいは焼けちまったんだ。後のことは村の連中に考えさせるさ。俺たちはとにかく、金が貰えりゃいいんだ……よっ、と」
言葉尻で勢いをつけて立ち上がる。いつまでも座り込んでても仕方がねえ。
「さて、行くか。黒鉄、雪白、おっかねえ村人からご主人様を守ってやるんだぞ」

俺が言うと、二匹のわんころはそれぞれなりの反応を見せた。つまり、雪白は「おまえに言われる筋合いはない」とばかりの面をし、黒鉄はピンと耳を立ててワンと一声。頼もしいこった。

そんなわけで、俺たちは煤けてぼろっちくなったまま、来た道を引き返した。

すれ違いざまに何人かが、ぎょっとしたり、慌ててどこかへ走ってったりした。周旋屋へ知らせに行くんだろう。けっ。

道々、真理の奴はずっと黙りこくっていた。何を考えているのやら、難しい顔をして。ま、なんとなく想像はつくがね。だから俺は、周旋屋の前で真理のちっせえ鼻先に指を突き付けてやった。

「おい。話せば分かる、なんて甘いこと考えるなよ」

どうやら図星だったらしい。真理は途端に嫌な顔をしやがった。拗ねたって可愛かねえぞ、馬鹿。

「世の中、おまえが考えるほど簡単じゃねえんだ。どんなご立派なことを言ったってな、生きのびなきゃ何の意味もねえ。大体、これ以上深入りしたって、後々ここの連中の面倒見られるわけでもねえだろ。な？　おまえは黙って、俺に任せときな」

「……わかったよ」

「ようし、いい子だ。じゃ、おまえとわんころどもは、ここに立って退路を確保しとけ。村の衆を近寄らせるんじゃねえぞ」

言い置いて、俺は暖簾をくぐった。

中にはまあ、怖そうな顔の若い衆がひい、ふう、みい……六人ばかり。狭苦しい店で待ち伏せとは、ご苦労なこった。だが、俺が月華の鯉口を切ると、どいつも怯んだ様子を見せた。

「ひと仕事片付けてきた流れ者を労ってくれる、ってぇ雰囲気じゃねえな。言っとくが、いまさら俺をぶちのめしても意味がねえぜ。あの妖は盛大に燃えちまったからな」

「何の事ですかね」

周旋屋の親父が陰気な声で言った。もちろん、とぼけているわけじゃねえ。目と目が合うと、相手は一切了承済み、ってのが分かっ

た。俺は肩を竦め、番台に近付いた。
「あんたが追い出してくれっつった巫師のじじいはな、妖が化けてたのさ。だから退治した。結果としちゃ、依頼の通りだ。あとは金さえ貰えりゃ、いつもの仕事と同じ、吹聴するほどのこともねえ」
要するに、出すもん出しゃぁ黙っといてやる、って事だ。お互い、そこまで口にしたりはしねえが、親父もその事は分かってる。黙って番台の下から、銭の入った巾着を取り出した。じゃらりと音ばかりは大層だが、銅銭ばかりで銀は一枚もねえ。
「ちと足りねえんじゃねえかい。前払いの分を合わせても、二人分の報酬には少ないぜ」
「お客さん、欲深は運を逃すことになりますよ」
「そんなら神殿に行って、悪運を祓ってもらうさ」
ちくちくと嫌な応酬が続く。これまで何人の流れ者が同じようにこの親父に文句をつけて、ここに控えている若い衆にのされちまったのやら。連中が手を出さねえのは、ひとえに俺が見た目よりも腕の立つことを恐れているからだ。こっちがちょっとでも脅えたら、瞬く間に食いつかれるだろう。
しばらく睨み合った末に、親父は渋々と銀貨を出してきた。正直なところまだ足りねえと思ったが、親父の言う通り、欲は身を滅ぼす。ここらで手を打つか……。
俺は用心しながら素早く金を取り、袂に落とした。
「じゃ、あばよ。二度と来ねえから安心しな」
捨て台詞を残してさっさとおさらばしようとしたのだが、ちっとばかり動作が早すぎたらしい。背を向けた途端、俺の焦りを見抜いた親父が声を上げた。
「やれッ！」
同時に俺は、前へ飛ぶように転がった。空振りした棒や竹竿が絡まり、派手に騒ぎ立てる。俺は振り返らず、そのまま表へ飛び出した。
だが、それより先へは行けなかった。手に手に鍬だの鎌だの持っ

た連中が、ぐるりと店を取り囲んでいたのだ。二匹のわんころが牙をむいて唸っているが、じわじわと村人の半円が縮まってくる。中には申し訳なさそうな顔をした女までいやがった。くそ、悪いと思うんなら一緒になってんじゃねえよ！

「おじさん……」

真理が青ざめた顔で振り向く。さもありなん、妖と違ってこいつらは人間だ。簡単に吹っ飛ばしたり斬り殺したりできるもんでもない。一人二人ならちょいと怪我をさせてやりゃ逃げるだろうが、これだけ大勢となると、かえって逆上して手がつけられなくなっちまう。なぶり殺しにされるなんざ、考えたくもねえや。

俺は真理と背中合わせに立ち、店から飛び出してきた血の気の多い奴を、顔面への一撃で殴り倒してやった。

四　村人と影（2）

「そいつらを村の外に出すな！」
店の奥から周旋屋の怒声が飛んだ。
「ちっ、疑り深ぇ親父だぜ。二度と来ねえっつってんだろが！　それとも何か、これっぽかしの手切れ金も惜しいのかよ！」
「金は問題じゃぁないんですよ」
親父が戸口に姿を現す。最初のいけ好かねえ丸ぽちゃ親父の印象は、いまや他人の血で肥え太った極悪人に変わっていた。まったく、まさかここまでとはね。俺は月華の柄にそっと手をかけた。
「だったら何だってんだ。言ったろ、俺は金さえ貰えば、おまえらがやっていた事についちゃ気にしねえ。それに、あの妖が焼けちまった今じゃ、何を吹聴してもただの法螺にしかならねえんだ。何も問題はねえだろうが」
返事がない。俺は背筋がぞくっとした。おいおい、まさか……
「あれで終わりじゃねえってのか？」
声がかすれた。背中越しに、真理が身をこわばらせるのが分かる。ちくしょう、こりゃまずいぞ。
「あれのことを知られたら、この村は終わりだ」
人垣の中から、誰かが言った。
「可哀想だけどね、よそ者は信用できないんだよ」
ごめんね、なんぞと言いながら、女が鎌を握り直す。勘弁してくれ。
と、いきなり真理が声を上げた。
「いったい……どうして、どうしてそこまでして妖をかばうんですか。あの妖がそんなに大切なんですか！？」
泣き出しそうな声に、村人たちが一瞬、たじろいだ。さすがに後ろめたいらしい。だがそれでも、囲みは緩まなかった。慣れてやがるんだ、こいつらは。助けてくれって声も、しゃべらないから見逃

してくれって頼みも、こいつらは聞き飽きて何も感じなくなってやがるに違いねえ。なんて連中だ、くそっ！
「坊や、あの榛（はん）の木はあたしらにとって、なくちゃならないものなんだよ。ここで暮らせばきっと分かるよ」
別の女が言った。途端に、馬鹿を言うな、とまわりから咎められる。なるほど、大人は殺しても胸が痛まねえが、子供だから助けてやろうってわけかい。一生この村に留まらせれば、秘密も漏れねえってか？　図々しい。
緊張のせいか、頭の回転がいつもの倍ぐらいに速くなった気がした。
あの妖はこいつら全員にとって「なくちゃならないもの」だが、いなくなったら途端に何かが変わるってもんでもないらしい。燃えた時に何も起こらなかったしな。
で、奴はもともと榛の木で、つまり湿地に生えるが田圃の畦にもよく植えられてたりする木だ。奴がいたのも小川の上流。そういや川っぺりに若木が植えられてたよなぁ。しかもこの豊平はその名の通り豊かな米蔵。とくれば……。
「ははぁ、なるほどね。おまえら、あの妖に何か細工させてたんだな？　稲がよく実るように、水や土にまぜものでもさせてたんだろう」
「――――！」
背後で真理が息を飲む。村人たちの顔色がさっと変わった。大当たり。
道理で白黒二匹がやたらと水辺を嗅ぎ回っていたわけだ。世話の行き届いた田圃だと思ったが、雑草も虫も、あまりにも余計なものがなさすぎた。飯が変な味だったのも、穢れた水で育ったせいだな。
納得している俺に、周旋屋の親父が苦々しく唸った。
「ご明察。流れ者にしては頭が切れなさるね」
「そりゃどうも。褒めたついでに見逃しちゃくれねえか。それとも、こっちの切れ味も試してみたいかい」

月華を鞘の上から軽く叩く。真相を見抜かれたところへ脅しをかけられ、さすがに親父も怯んだ。が、やっぱりそれでも、覚悟は変わらねえらしい。後ずさったのもわずかに半歩、すぐに威儀を正して、腰の引けた村人たちをぐっとねめまわしやがった。

こうなったら仕方がねえ。俺はため息をつくと、諦めて月華の柄を握った。気は進まねえが、何人かぶった斬ってでも逃げなきゃな。何せ今は小僧と犬を養ってんだからよ。

「おい真理……」

背中越しにひそっとささやく。囲みの薄そうな所を指して、同時に突っ込むぞ、と合図した。が、真理の奴、聞いちゃいなかった。真っ黒な目を見開いて、自分たちの影が長く伸びている通りの向こうを凝視したまま、かたまっちまってやがる。

しっかりしろ、と言いかけてその瞬間、俺も立ち竦んだ。

地面につけた両足から、ぞわぞわっ、とものすごい悪寒が体をはいあがり、頭のてっぺんまで突き抜けたのだ。髪が全部逆立つ気がした。何だよこれは！

視線を落とすと、二匹の犬が耳をぴったり寝かせ、鼻面に皺を寄せて牙をむき出していた。が、尻尾は足の間に巻き込まれ、今にもキャンキャン鳴いて逃げ出しそうだ。

村の連中は俺たちほどには敏感じゃねえらしいが、それでも何か寒気はしたらしい。顔を見合わせ、ざわつきながらてんでに背後を振り返る。

「やばい」

口が勝手につぶやいた。まずい、いけねえ、何か良くねえもんが来やがる。俺の頭にはもう、村の連中のことなんざ微塵も残っちゃいなかった。

お天道様が沈んでいくのを、縄をかけてでも引き戻したくなった。東の方から薄闇が迫ってくる。その中に出来たひときわ暗い影が、通りの向こうからやって来る。

あいつだ。

村に入る前に、道で俺たちの後をつけてきた、あの影だ。ちくしょう！

逃げなきゃならねえのは分かってるのに、足は動かねえし、声も出せねえ。

視界の隅で、村人たちが同じように石になっちまっている。やがて、一番影に近い所にいた奴が、ふらっとよろけてそのままばったり仰向けにひっくり返っちまった。

そしてまたひとり、膝をついて前のめりに倒れ臥す。続いて二、三人が同時に。

人が倒れるにつれて、影が濃く暗くなっていくように見える。夕焼け空までがその闇に毒されて、不気味な色に変わっていた。

「ひ……」

誰かがかすれ声をもらした。それが引き金になって、すさまじい悲鳴がいっせいに上がる。金切り声、泣き声、うろたえ怯えて助けを求める声。蜘蛛の子を散らすように、もう俺たちの事なんざ無視して、てんでに影から遠ざかろうと逃げて行く。

俺も弾かれたように走り出していた。格好悪いが、この際そんなこた言ってられねえ。

だが十歩も行かずに慌てて止まり、振り返った。小僧も犬もついて来ねえ！

「何やってんだ馬鹿野郎！　早く来い、逃げるんだ！」

ちくしょう、枯れ木じじいには怯まなかったくせに、何で立ち往生しやがるんだよ。

「こっちを見ろって！　置いてくぞ、この愚図！」

地団駄踏んで喚く俺に一瞥もくれず、真理はやおら手をもたげ、パァンと大きくひとつ柏手（かしわで）を打った。澄んでよく通るその音が、影のもたらす嫌な空気を、わずかに払いのけてくれた気がした。続けてもう一度。音に押されたように、影が歩みを止める。

「かけまくも畏き祓処（はらえどこ）の大神等（おおかみたち）、よろずの枉事罪穢れを……」

真理が祝詞（のりと）を唱えだす。悠長なこと言ってて、本当に効き目があ

るんだろうな、おい。んな事してねえで逃げた方が賢いんじゃねえのか？

「はらいたまい清めたまえと……」

声が震えた。影がまた動きだしやがったのだ。そら見たことか！

もうあとほんの数歩しか離れてねえ。

「真理！　そいつは放っといて逃げろ、祓おうなんざ考えるな！」

こっちが喉を嗄らして叫んでるってのに、真理の奴は振り向きもしねえ。これだから聞き分けの悪い餓鬼は！　白黒の二匹はもうぴったり真理の足にへばりついていて、役に立ちそうにねえ。

「えいくそ、世話の焼ける！」

なんで俺がここまでしなきゃならねえんだ、我ながら自分に腹が立つ！

俺は思い切って駆け戻り、真理の腕をひっつかんだ。同時に影がぬうっと津波のように大きく立ち上がる。

「逃げろわんころども！」

無我夢中で俺は犬どもを蹴った。ギャンとも言わず、二匹は転がるように駆けて行く。影が落ちて俺たちを飲み込む寸前、何とか真理を思い切り突き飛ばしてやった。

頭の上から影が覆いかぶさる。闇に包まれたと同時に、なぜか昔の記憶がでたらめに脳裏をよぎった。弟と竹馬遊びをしたこと。おふくろの打ち掛け。親父の死にざま……

あぁやれやれ、親子揃って化け物にやられて頓死かよ。みっともねえなぁ。

――と、観念しかけたその時、

「やめろ！」

真理の絶叫が響くや、玻璃の砕けるような音がして、俺のまわりに数多（あまた）の星が弾けた。

「うわっ！？　何だ、こりゃいったい」

驚いて目をぱちくりさせたその瞬間に、星の光はもう消えてなくなっていた。ついでに、どういうわけだか、影までも。

「……何だぁ？」

往来に立ち尽くしたまま、俺はぽかーんと口を開けてしまった。

四　村人と影（3）

空はすっかり元通り、きれいな夕焼けの朱色と藤色がまじり合い、明るい星がひとつふたつ、瞬き始めていた。倒れたままの村人がいなけりゃ、まるで何も起こらなかったみてえだ。何なんだ、何がどうなってんだ？

「おじさん、大丈夫？」

真理が駆けつけ、二匹の犬もいささか面目なさそうに寄って来る。

「どうやら無事だよ。おまえ、あの影に何かしたのか？　いきなり消えちまったぜ」

「俺は何もしてないよ。祓詞（はらえことば）はちっとも効かなかったし、まさか、やめろって言ったから消えた、なんてわけもないだろうし。おじさん、お守りか何か持ってるんじゃないの？」

「あいにく、そんなものが買えるほど懐に余裕はねえよ。心当たりとしたら月華ぐらいだが、今までこんな事はなかったしなぁ」

俺はしげしげと月華を眺めた。たったひとつ譲り受けた、親父の形見。一応は由緒ある銘刀らしいが、そういう逸話が残されているでもねえし、神殿の連中も、何も言わなかったしなぁ。俺は結局、よく分からねえ、と肩を竦めた。

「とにかく、今の内にとっとと逃げようぜ。村の連中が戻ってきたら、ますますややこしいことになっちまう」

「でも、倒れてる人たちは？」

「さあね。死んだか、気を失ってんのか知らねえが、自業自得さ。そうか、分かったぞ。あの影はきっと天罰だ。性根の腐ったこの村の連中に、天罰が下ったのさ。俺は善人だから助かったんだ、きっとそうだ」

うんうん。日頃の行いがものを言うってわけだ。

俺が納得してうなずいていると、真理が嫌な突っ込みを入れやがった。

「善い人だって言うなら、このまま見捨てて行くのはひどいんじゃない？」
うぬ。可愛くねえな、この餓鬼ゃ。
「あのなぁ……俺たちを殺そうとした奴らだぞ。生きようが死のうが、知ったことかよ」
「駄目だよ」
真理は妙にきっぱり言って、倒れた村人のかたわらに膝をついた。
ははぁ……なるほど。
「おまえのせいだから、か？」
ささやくように問いかける。村の連中がどこかで聞いてたら面倒だ。案の定、真理は振り向きもせず、小さな声で「多分」と答えた。
「多分？」
「後で話すよ」
真理が言うと同時に、その足元に転がっていた村人が、うーんと唸って目を開けた。若い男だ。怒りか恐怖で叫び出すかと思いきや、ぼうっとした様子で宙を見たまま口を半開きにしてやがる。俺はちょっとそいつを観察してから、別の奴を起こしに行った。もちろん、親切にしてやる義理なんざねえから、蹴飛ばしてやったわけだがね。
倒れた連中は全員ちゃんと生きてはいたが、どいつもこいつも魂が抜けたみてえにぽかんとして、何の反応も見せなかった。薄気味悪い。
「こいつら、どうなるんだ？」
「分からない。今までに影が人を襲うことなんて、なかったから」
答えた真理の声は沈痛だった。よく罪悪感なんざ抱けるもんだ。あの影が何にしろ、俺たちはお陰で助かったようなもんだろうに。慈悲深いんだか、馬鹿なんだか。
「とにかく生きてるんならいいさ。あとはこいつらの身内がどうにかするだろうよ。心配だってんなら、どこかで神殿に寄って事の次第を報告すりゃいいさ」
行くぞ、と真理の腕を取って立たせる。地べたに座り込んだまま

の村人が、うつろな目でこっちを見上げて、しまりのない薄笑いを浮かべた。口元に力が入らなくて、勝手に顎が下がっただけかも知れねえが。
　さすがに俺も気持ち悪くて見ていられず、無理やり真理を引きずるようにして、村から逃げ出した。袂でチャラチャラ音を立てる銭が、どうにも重かった。

「で、結局また野宿なわけか……。はあ」
　街道脇のでっけえ樫の根元で、俺は焚き火を起こした。布団が恋しいぜ……。
「ごめん、おじさん」
「謝るこたぁねえよ。運が悪かったのさ。それに、おまえがいなきゃ俺はあの妖の肥やしにされておしまいだった。だから、無理にお前のせいにしようとは思わねえよ。理由を話したくなきゃ話さなくていい。俺も聞きたいわけじゃねえんだから」
　乾いた枝を火に食わせ、ごろんと横になる。腹はへってるし疲れてるし、もうふて寝するしかしょうがねえ。
「……あの影はね」
　ぽつ、と真理が話しだした。俺が顔だけ振り向くと、小僧は雪白の首を掻きながら、じっと地面を見つめていた。
「深谷を出た時からついて来てるんだ。あれは……きっと、『災い』なんだと思う」
　パチパチッ、と炎がはぜた。揺らぐ明かりに照らされた横顔が、急にただの無力な子供に見えて、俺はいたたまれず目をそらした。
　なるほどな。こんなちっせえ餓鬼が一人で修行の旅なんざ、おかしいと思ったんだ。
「おまえ、押し付けられたんだな」
　何があったのか知らねえが、深谷を襲った災いを、里の連中は子供一人にくっつけて追い払ったんだろう。ひでえ連中だ。
「違うよ」

答えた真理の声は、泣き出しそうだった。本気で違うと言っているのか、違うと思いたくて否定しているだけなのか、よく分からなかった。俺がじっと真理を見ていると、やがてこっちを見て、悲しそうに笑った。
「知ってたんだ」
「……そうか」
「うん」
それきり、言葉が続かない。俺は何とも言えず、ちろちろと踊る炎を見つめた。
谷の連中が何をどう言ったのか、それとも何も言わなかったのか、それは分からねえ。どっちにしろ、可愛げなくも察しの良いこいつが、進んであの影を引き受けたってことは想像がつく。
しばらく待って、真理には事情を話す気がないとはっきりすると、俺は勢いをつけて起き上がった。
「ま、済んじまった事はしょうがねえ。今さら、ああすりゃ良かったのどうのと言ったところで、何かが変わるわけでもねえしな。で、あいつはまだついて来ると思うか？　今んところは消えちまってるようだが」
「分からない。でも、あれは……弾かれたって感じで、消されたようには思えなかった。ちょっと遠くへ弾き飛ばされてるけど、また戻ってくるって気がする」
「んじゃ、祓う方法は？」
俺が訊くと、真理はまた、分からない、と首を振った。
「祝詞や弦打（つるうち）がまったく効かないわけじゃないみたいだけど、祓い清めるには……何かもっと別の方法が必要なんだと思う。明師様が俺に『しるし』を探しに行けって言ったのは、そういう意味なのかもしれない」
「しかしその『しるし』ってのは何なのか、手掛かりひとつねえんだろ？　そりゃ、随分と先が長そうだな」
俺はわざと素っ気なく言って、相手の反応を見た。案の定、真理

はちょいとばかり不安げな顔をしてこちらを振り返った。俺はとぼけて手を振ってやる。
「まぁ頑張れよ」
真理は何か言おうとして口を開きかけたが、遠慮がはたらいたのか、そのままうつむいて黙り込んだ。まったく、こいつときたら。子供らしくねえ事してっから、災いなんぞ押し付けられるんだ、馬鹿。
キュゥン、と声がして目をやると、黒鉄が主人よりもよっぽど素直な目で、俺を見つめていた。俺は思わず苦笑し、真っ黒な頭を掻いて毛を逆立ててやった。それから俺は腕組みし、おもむろに切り出した。
「さて、お別れする前にひとつふたつ、片付けとかにゃならねえ問題があるな」
「問題？」
真理がきょとんとして聞き返す。俺は袂から銭の巾着を取り出した。
「ひとつはこいつだ。仕事を請けたのは俺だし、とどめを刺したのも俺。周旋屋に交渉してこれだけの金をもぎ取ったのも、俺」
俺、俺、と数え上げていくと、さすがに真理も面白くなさそうな顔をした。おお、正直でよろしい。その横で雪白が剣呑な目付きをしやがったので、俺は慌てて「とは言え」と言葉を続けた。
「おまえと白黒二匹がいなきゃ、そもそも俺は生きちゃいねえだろう。だからこいつは公平に折半といこう。それはいい。だがおまえがこの先も旅を続けるんなら、これっぽっちじゃ足りねえだろうよ。行く先々の神殿を頼るにしても、今回みたいに、次の神殿まで何日もかかる、ってなこともあるだろうし、かと言っておまえみたいな子供じゃ、周旋屋に行くわけにもいかねえしな。心優しい俺様としちゃ、胸が痛むわけだ」
大袈裟に胸を押さえた俺に、真理が胡散臭げなまなざしをくれた。
「何が言いたいのか、はっきりさせてくれない？」

「まあ待てよ。問題のふたつめはだな、俺の稼ぎと将来についてだ」
「……は？」
「俺も今まで結構長いこと妖退治をしてきたが、腕前と稼ぎについちゃ――まぁ、おまえも見ての通りさ。今まではそれでも何とかなったがよ、いつまでもこれじゃあ困る。いずれどっかに落ち着くためには、ちっとは金を貯めとかねえとな。だから、もちょっと実入りの良い仕事をするためにも、腕を上げにゃなんねえだろ？　たとえば、ナントカっておまえが言ってた法術を身につけるとかだな」
　そこまで話すと、やっと真理も結論が見えて来たらしく、だんだんと顔を明るくした。俺もつられてにやりとする。
「いっぺんに解決する方法がありますかね、真理様？」
「あるよ、もちろん！」真理が笑い出した。「俺がおじさんに法術を教えるよ。仕事も手伝う。それで稼ぎは折半。どう？」
「折半、ねえ。まあ、おまえにゃお供もいるこったし、それが妥当かね。だがおまえと一緒に行くんなら、もひとつ条件がある」
　言葉尻で真顔になり、俺はずいと身を乗り出して真理を睨みつけた。
「何だい？」
　ちょいと怯んだ様子の真理に、俺は思いっきり苦々しく言ってやった。
「俺を『おじさん』って呼ぶな！」
　――もちろん、返事はけたたましい笑い声だった。

（雷火之章・終）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4558y/

昏い道連れ

2011年11月29日21時54分発行